

杜若

禅竹作

ワキ

旅僧

シテ(女)

杜若の精

地は

三河

季は

四月

ワキ詞

「是は諸国一見の僧にて候。我此間は都に候ひて。洛陽の名所旧跡残りなく一見仕りて候。又是より東国行脚と志し候。

道行

「夕べくの仮枕。く。宿はあまたにかはれども。同じ憂き寐の美濃尾張。三河の国に着きにけり。く。

詞

「急ぎ候ふ間。程なう三河の国に着きて候。又これなる沢辺に杜若の今を盛と見えて候。立ちより詠

めばやと思ひ候。げにや光陰とまらず。春過ぎ夏も来て。草木心なしとは申せども。時を忘れぬ花の色。かほよ花とも申すやらん。あら美しの杜若やな。

シテ詞

「なふく御僧。何しに其沢には休らひ給ひ候ふぞ。

ワキ詞

「是は諸国一見の者にて候ふが。杜若のおもしろさに詠め居て候。さてこゝをばいづくと申し候ふぞ。

シテ

「是こそ三河の国八橋とて。杜若の名所にて候へ。

さすがにこの杜若は。名におふ花の名所なれば。色も一しほ濃紫の。なべての花のゆかりとも。思ひなぞらへ給はずして。取りわき詠め給へかし。あら心なの旅人やな。

^{ワキ}「げにく／＼三河の国八橋の杜若は。古歌にもよまれけるとなり。何れの歌人の言の葉やらん承りたくこそ候へ。

^{シテ}「伊勢物語にいはく。こゝを八橋といひけるは。水行く河の蜘蛛手なれば。橋を八つ渡せるなり。其沢に杜若のいと面白く咲き乱れたるを。ある人かきつばたと云ふ五文字を句の上に置きて。旅の心をよめと言ひければ。唐衣着つゝなれにし妻しあれば。はる／＼来ぬる旅をしぞ思ふ。これ在原の業平の。此杜若をよみし歌なり。

^{ワキ}「あら面白やさては此。東のはての国々までも。業平は下り給ひけるか。

シテ「こと新しき問事かな。此八橋のこゝのみか。猶し
も心の奥ふかき。名所々々の道すがら。

ワキ「国々ところは多けれども。取りわき心の末かけて。

シテ「思ひわたりし八橋の。

ワキ「三河の沢の杜若。

シテ「はるぐきぬる旅をしぞ。

ワキ「思ひの色を世に残して。

シテ「主は昔に業平なれども。

ワキ「かたみの花は。

シテ「今こゝに。

地「在原の。跡な隔てそ杜若。く。沢辺の水の浅か

らず。契りし人も八橋の。蜘蛛手に物ぞ思はるゝ。

今とても旅人に。昔を語る今日の暮。やがて馴れ
ぬる心かな。く。

シテ詞「いかに申すべき事の候。

ワキ詞「何事にて候ふぞ。

シテ「見ぐるしく候へども。わらはが庵にて一夜を御明
かし候へ。」

ワキ「あらうれしややがて参り候ふべし。」

シテ「なふく此冠唐衣御覧候へ。」

ワキ「不思議やな賤しき賤の臥処より。色もかゝやく衣
を着。透額の冠を着し。これ見よと承る。こは
そも如何なる事にて候ふぞ。」

シテ「是こそ此歌によまれたる唐衣。高子の後の御衣に
て候へ。又此冠は業平の。豊の明の五節の舞の冠
なれば。かたみの冠唐衣。身に添へ持ちて候ふな
り。」

ワキ「冠唐衣は先々置きぬ。さてく御身は如何なる人
ぞ。」

シテ「誠は我は杜若の精なり。植ゑおきし昔の宿の杜若
と。よみしも女の杜若に。なりし謂の言葉なり。
又業平は極樂の。歌舞の菩薩の化現なれば。よみ

おく和歌の言の葉までも。皆法身説法の妙文なれば。草木までも露の恵の。仏果の縁を弔ふなり。

ワキ「是は末世の奇特かな。正しき非情の草木に。言葉をかはず法の声。

シテ「仏事をなすや業平の。昔男の舞の姿。

ワキ「是ぞ即ち歌舞の菩薩の。

シテ「仮に衆生と業平の。

ワキ「本地寂光の都を出で。」

シテ「普く濟度。

ワキ「利生の。

シテ「道に。

地「はるぐ来ぬる唐ころも。く。着つゝや舞を奏づらん。

シテ「別れこし。跡の恨みの唐衣。

地「袖を都に返さばや。

シテクリ「抑此物語は。如何なる人の何事によつて。

地「思ひの露の信夫山。忍びて通ふ道芝の。始めもな
く終りもなし。

シテサシ「昔男初冠して奈良の京。春日の里に知るよしゝて
狩にいにけり。

地「仁明天皇の御宇かとよ。いともかしくき勅をうけ
て。大内山の春がすみ。立つや弥生の初めつかた。
春日の祭の勅使として。透額の冠を許さる。

シテ「君の恵の深き故。

地「殿上にての元服の事。当時其例稀なる故に。初冠
とは申すとかや。

クセ「然れども世の中の。一度は栄え。一度は衰ふる理の。
誠なりける身のゆくへ。住所求むとて。東の方に
行く雲の。伊勢や尾張の。海面に立つ波を見て。
いとゞしく。過ぎにし方の恋しきに。羨ましくも
かへる浪かなと。うち詠めゆけば信濃なる。浅間
の嶽なれや。くゆる煙の夕気色。

シテ「さてこそ信濃なる。浅間の嶽に立つ煙。

地「遠近人の。見やはとがめぬと口ずさび。猶はるぐの旅衣。三河の国に着きしかば。こゝぞ名にある八橋の。沢辺に匂ふ杜若。花紫のゆかりなれば。妻しあるやと。思ひぞ出づる都人。然るに此物語。其品おほき事ながら。とりわき此八橋や。三河の水の底ひなく。契りし人々のかずくに。名をかへ品をかへて。人待つ女物病み。玉すだれ

の。光りも乱れて飛ぶ螢の。雲の上までいぬべくは。秋風吹くと仮にあらはれ。衆生済度の我ぞとは。知るや否や世の人の。

シテ「暗きに行かぬ有明の。

地「光り普き月やあらぬ。春やむかしの春ならぬ。我身ひとつはもとの身にして。本覚真如の身を分け。陰陽の神といはれしも。唯業平の事ぞかし。かやうに申す物がたり。疑はせ給ふな旅人。遥々来ぬ

る唐衣。着つゝや舞をかなづらん。

シテ「花前に蝶まふ紛々たる雪。

地「柳上に鶯飛ぶ片々たる金。（序の舞）

シテ「植ゑ置きし。昔の宿のかきつばた。

地「色ばかりこそ昔なりけれ。く。色ばかりこそ。

シテ「むかし男の名を留めて。花橘の匂ひうつる。菖蒲

の鬘の。

地「色はいづれ。似たりや似たり杜若花菖蒲。梢に鳴

くは。

シテ「蝉の唐衣の。

地「袖白妙の卯の花の雪の。夜も白々と明くる東雲の。

浅紫の杜若の。花も悟りの心開けて。すはや今こ

そ草木国土。く。悉皆成仏の。御法を得てこ

そ失せにけれ。